

CONTENTS

教育研究会より	1・2
研究会紹介「ICT活用授業研究会」	3
学習紹介：「基本の運動『お話マット』」	4
学習紹介：「子ども自身の学びと教室での学び」	5
学習紹介：「総合と教科の連携による学びの深まり」	6
学習紹介：「国語科における協同的な学びの実現」	7
コラム：「『算数を学ぶ』から『算数で学ぶ』へ」	8

学びの質の高まりをめざして

～「つなぐ」「もどす」とみとりと支援により～

教育研究会を終えて



研究主任 志場 俊之

3年目を迎える土曜日開催。期待と不安が入り混じる中、今年も、600名を超える方が参会してくれました。多くの方の視線を受けながら、本校研究会を開催できたこと、厚くお礼申し上げます。

本年度は、「学びの質の高まりをめざして」という研究主題を掲げ、サブテーマを「『つなぐ』『もどす』みとりと支援により」として、研究を進めてまいりました。

年度当初から、研究主題についての共通理解を図るため、校内研修にワークショップ形式を取り入れ、わたし自身も主体的に学ぶ機会を持ち、「学び」を肌で感じようと努めました。

学びの質をどのように捉え、それをどのように高めていくのか。また、みとりや支援にどのような視点を持ってよいのか。どのような場面で、どのようにみとり、どのように支援していくのか。悩み続けた末にできあがった単元の学習は、わたしたちの渾身の力作であります。

午前中、のべ23の教室で、個性ある教師の個性あふれる授業を提供することができたと自負しております。

昨年に引き続き記念講演をしてくださった佐藤学先生からも、わたしたちの取り組みに対して、

1. 21世紀型の学校のパイロットスクールへ
2. 21世紀型の学びの様式の先導的モデルを提供する学校へ
3. 学びの「質」において卓越性を示す学校へ
4. 専門家共同体のモデルスクールへ
5. 大学との協同、公立学校とのネットワークの拠点校へ

という熱い期待のお言葉をいただき、職員一同身の引き締まる思いでいっぱいです。

また、参会者の方々からも忌憚のないご意見やご指摘をいただくことができましたこと、とてもうれしく思っています。アンケートの内容も含め、真摯に受け止めるとともに、今後の研究に生かしていきたいと考えています。

そのためには、昨年度、佐藤先生からご指摘のあった、「授業の成立」と「学びの成立」の違いについて、もう少し意識する必要があるように思います。

「学びの成立」という、子ども側に立ち、子どもが主体的に学び、どの子どももジャンプできるように、そうして学んだ実感を得られるような学びをめざしていけるよう取り組んできたつもりでしたが、学習形態の工夫や学習課題の質的な問題、子どもの主体性・協同性をどのように作り上げていくのかなど、まだまだ「学びの成立」へ向けての課題が山積しているからです。

また、「学びの質の高まり」を目指す前提としての、「学びの環境作り」「みとりと支援」「プロジェクト的なカリキュラム」についても、なお一層、学級経営における重要な課題として位置づけることが必要であると実感しました。

どの子どもも主体的に授業に参加し、どの子どもも課題に対して積極的にアプローチを繰り返し、そうして、自分の力で学び取ったという喜びを実感できる「学びの成立」を目指した授業を作り上げるよう、努力していきます。そして、それが、より質の高い、深みのあるものになるよう、これからの研究を進めて参ります。

ありがとうございました。

研究会★レポート

それぞれに『発想力・論理力・表現力』の育成を意図した授業を構想し、言葉にこだわりながら、対象・他者・自己と対話する子どもの学びの実際を見て頂きました。協議会での意見を生かし、平成20年2月15日(金)の「国語力向上モデル事業研究発表会」では、さらに成長した子どもたちの姿を見て頂けるよう取り組んでいます。

国語科

今年度、『ひとりひとりの学びの充実をめざして』をテーマに研究をすすめてきました。研究発表会では、3年「畑で働く人のすごさ」5年「どうして翌日届くのかな?」6年「6Aえ～町プロジェクト」の授業を行い、それぞれのクラスの課題についてみんなで話し合いました。協議会では貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。

社会科

算数科では本年度『子どもがつなげる算数科学習～思考の「ずれ」を生かして～』というテーマで研究を進めてきました。1年・2年・5年のそれぞれで子どもの思考のずれを生かした授業を公開しました。協議会では多くの示唆あるご意見・ご助言を頂きました。今後の研究に活かしていきたいと思えます。ありがとうございました。

算数科

今年度、「自然の“文脈”をさぐる子どもを育てる理科学習」をテーマに取り組みを進めてきました。3年生では、磁石と磁石とを近づけたときの間にはたらく力のひみつをさぐり、4年生では、水のあたたまり方の“文脈”をさぐりました。子どもたちは実験結果や既習事項をもとにして、自分たちの考えを再構成していくことができました。

理科

頑丈な土だんごを作りたい!という子どもの願いから始まった土だんご作り。粘土で作った土だんごより強いのはあるのか?立命館大学1回生との「振り子衝突バトル」「坂道転がしバトル」で、頑丈さを確かめました。必死に友だちを応援する姿。接戦の末、1年生の勝利。やったあ!

生活科

今年度は「楽しく学ぶ音楽の基礎・基本」をテーマに研究を進めてきました。器楽・創作領域を中心に1年・6年の授業を見ていただき、ふしづくりやグループ学習で得られる学びが子どもの生涯音楽にどうつながっていくかについて提案しました。

音楽科

4年生の「4Aリレー」では「スピードを落とさないバトンパス」をめざし、バトンパス練習 - レースを行いました。2年生の「お話しマット」では、自分たちで考えたお話にあわせたグループの表現を発表し合いました。どちらの単元も、スポーツのおもしろさを、子どもたちどうしのかかわりで発見していく学習をめざしました。

体育科

『個と個のつながりを深め、主体的に学び合う複式教育』という研究テーマのもと、第1校時では1・2年が国語、3・4年が算数、5・6年が理科、の学習において、また、第2校時目では複式学級全児童による縦割り班活動「きょうりょくプロジェクト」において、子どもたちが【発信 - 受信 - 再発信】を繰り返して、学び合おうとする姿を見ていただきました。協議会でいただいたご意見を、今後の研究に活かしたいと思います。

複式

今年度、総合部の研究主題を「学び続ける子ども」として、3年生では和歌山の名産である柿を中心とした食育を、5年生では学校ビオトープづくりを中心とした環境をテーマに進めてきました。“ほんまもん”体験をたっぷりを行い、それらをつなげ、学びを深めていきました。

そうごう

和歌山大学の留学生をゲストティーチャーとして迎え、児童たちは和歌山の良さを英語で伝えました。関空で実施するプロジェクトのリーハーサル的段階でした。協議会では、英語活動について疑問や不安、期待などが活発に話されました。

英語活動

附属小学校 ICT活用授業研究会

『温故知新！ICT de 知・徳・体！』

日時 平成20年2月1日(金)13時～17時

1, 全体会 (基調提案)

13時00分～13時10分 【メディアホール】

「本校の ICT 活用授業の現状と本研究会の位置づけについて」

中井章博 (本校教諭 ICT 研究部主任)

2, 提案授業・公開授業

13時15分～14時00分

教科等	授業学級	単元・題材名	授業者	活動場所
社会・そうごう	3 B	【提案授業】くらしと命を支える	藤原ゆうこ	3 B 教室
学級活動	1 A	としょコーナーのひみつ	田辺麻衣子	1 A 教室
算数	1 B	かずのふしぎ	岡田 明彦	1 B 教室
算数	1 C	大きいかず	梅本 優子	1 C 教室
国語	1・2 F	たのしかったことをつたえよう	北川 勝則	1・2F 教室
算数	2 B	もっと大きい数をしらべよう	北端 一喜	2 B 教室
社会	3 A	くらしを守る	山崎 立也	3 A 教室
そうごう	3・4 F	パソコンを使ってクラス文集を作ろう	市川 哲哉	3・4F 教室
体育	4 A	フラッグ・フットボール	坂本 桂	体育館
理科	4 B	水のすがた	馬場 敦義	4 B 教室
音楽	5 A	日本の音楽を味わおう	江田 司	第1音楽室
図工	5 B	遠近感を表現してみよう	土岐 哲也	5 B 教室
社会	5 C	わたしたちの生活と環境	片桐 宏	5 C 教室
そうごう	6 A	6 A え～町プロジェクト	田中いずみ	6 A 教室
英語活動	6 B	世界の人とコミュニケーションをしよう	辻 伸幸	6 B 教室
国語	6 C	やまなし	須佐 宏	PCルーム

3, 研究授業

14時10分～14時55分

教科等	授業学級	単元・題材名	授業者	活動場所
算数	2 A	九九のきまり	宇田 智津	2 A 教室
学級活動	2 C	「無料」にだまされるな！	西村 充司	2 C 教室
理科	3 C	めざせアインシュタイン～光のひみつをさぐる～	中井 章博	3 C 教室
国語・そうごう	4 C	アップとルーズ DE エコ日記	志場 俊之	4 C 教室
そうごう	5 A	まがたま池再生プロジェクト P R 大作戦！！	山中 昭岳	PCルーム
そうごう	5・6 F	ネット De 交流！ ～めざせ！掲示板の達人！～	辻本 和孝	複式ワークルーム

4, 分科会

15時05分～15時35分

教科の情報化 【体育館】

助言：木原 俊行 先生
 助言：岩井 達之 先生
 授業者：宇田 智津 (2A)
 中井 章博 (3C)

情報モラルの育成【オレンジルーム】

助言：堀田 龍也 先生
 助言：豊田 充崇 先生
 授業者：西村 充司 (2C)
 辻本 和孝 (5・6F)

情報活用能力の育成【中学校目的ホール】

助言：高橋 純 先生
 助言：野中 陽一 先生
 授業者：志場 俊之 (4C)
 山中 昭岳 (5A)

5, 全体会

15時45分～17時00分 【体育館】

対談

「提案授業から学ぶ」

コメンテーター：木原俊行先生(大阪教育大学・教授)
 堀田龍也先生(独立行政法人
 メディア教育開発センター研究開発部・准教授)
 提案授業者：藤原ゆうこ (本校職員・提案授業者)

パネルディスカッション

「これからのICT活用授業とは」

パネラー：木原俊行先生(大阪教育大学・教授)
 堀田龍也先生
 (独立行政法人メディア教育開発センター研究開発部・准教授)
 中井章博 (本校教諭・ICT 研究部主任)
 コーディネーター：野中陽一先生(和歌山大学教育学部附属教育実践総合センター・准教授)

基本の運動「お話マット」

～グループ創作の発表会～

体育科
2年B組担任
北端 一喜



本年度の体育科は、『新たな発見のある体育の学び～「わかること」「できること」「かかわること」を体育の授業に位置づける～』をテーマにして取り組んでいる。ここでは、研究発表会に提案した基本の運動領域の器械・器具を使った運動の実践についてまとめてみる。

< 本実践の主張点 >

基本の運動領域の「器械・器具を使った運動」であるマット遊び(運動)は、子どもたちに基礎的な運動感覚を育てていく上で大切な教材だと考える。ここでいう運動感覚は、逆さ感覚・腕支持感覚・あご出し感覚・体重移動感覚・回転感覚をいう。

マット遊び(運動)のおもしろさは、単に技を身に付けることだけではなく、マット上の空間で体を使ってどう表現するかという創作・表現活動にあると思う。回転技(前転・後転・側転など)やジャンプ、バランス技などを組み合わせて、個性豊かに連続技を創作・表現していくことにマット遊び(運動)のおもしろさがあるといえる。また、マット遊び(運動)の技は動きが比較的遅く、低学年の子どもでも技のできばえや直すところが見えやすいので、上手な技のコツを発見しやすく、お互い教え合ったり、見せ合ったりできるという利点がある。

「わかること」「できること」「かかわること」の中で、本単元では子どもたちのかかわり合いに視点を当てて授業を進めていくことにした。技を上達させるためのコツの教え合いや相互評価、「お話マット」づくりの話し合い等で、友だちの良さを認識したり、教えてもらったことでわかったり、できるようになったりすることがあることにも気づかせていくことで、新たな発見のある体育の学びが成立すると考えたからである。

<ねこちゃん体操>



山内基弘氏が考案した「ねこちゃん体操」を準備体操に取り入れ、器械体操で必要となる運動感覚(腕支持感覚、逆さ感覚、回転感覚など)を身に付けさせるようにした。

歌に合わせて、「あふり」や「そり」の感覚を覚え、楽しくブリッジや肩倒立に取り組めた。筋力ではまだまだ発達途中である2年生だが、継続して取り組むことで、ブリッジがきれいに

できるようになり、中にはブリッジの姿勢で片足を挙げるバランス感覚まで養うことができた

(子どもの感想から)

- ・大好きなブリッジが成功してうれしかった。
- ・肩倒立(足挙げ)のところは上手にできて楽しかったです。
- ・ブリッジをもっと上手にしたいです。
- ・段々コツがわかってきて楽しいです。

<「ねこちゃん体操」の参考文献>

「ねこちゃん体操からはじめる器械運動のトータル学習プラン」山内基弘著 創文企画
「みんなが輝く体育 小学校低学年 体育の授業」学校体育研究同志会 編 創文企画

<学びの高まり>～子どもの感想～

最初はバラバラだったけど、みんなで力を合わせたので、最後には間違えないでできた。(女子) 揃えることは見ていてきれいです。(男子) 教えてもらいながらがんばって、みんなから上手と言われたのがとてもうれしかった。(女子) お話で動きが合っていて、歌を歌わなくても分かりやすくてできました。(女子) みんなで協力して上手に演技ができてよかったと思った。(男子) 揃えることがとても大切なんだなあと思いました。(女子)

<「動物歩き」と「お話マット」>

「お話マット」の発表会を単元のまとめに位置づけ、「動物歩き」「回転系やバランス系の技の習得」「お話マットづくり」と3段階で授業を組み立てた。

「動物歩き」は全員で「くまさん歩き」を学習してから、グループ毎にいろいろな動物歩きを考えさせ、小発表会をした。トカゲやネズミ、ライオン、ウサギ、ラッコなど楽しい歩き方を考え出して、みんなの前で披露した。その際、歌のフレーズに合わせて全員がきれいに揃っているかを他の子で見合い、相互評価した。

その次の回転系の技の習得では、大きな前転や側転を練習し、「お話マット」の演技に生かせるようにした。それぞれの技のコツが理解できて、上手に回転できているかをグループでお互いに見合い、教え合った。コツの視点多すぎると、なかなか評価しづらかったので、コツを見る視点は1つか2つに絞らなければならないことがわかった。

「お話マット」の演技やフレーズ(言葉)を考えるときに、もめたり勝手な行動を取って、なかなか話し合いにならないグループもあったが、おもしろい動物歩きに回転系の技、バランス系の技を組み入れて、楽しい8小節の「お話」を完成させた。練習時に演技をVTRに撮り、フレーズに合わせてきれいに揃っているかを確認しながら、発表会に向けて練習を重ねた。

まとめの発表会では、お互いに上手にできていたことを出し合い、一人ひとりのがんばりや良さを認め合うことができた。みんなできれいに揃えることの難しさや楽しさ、すばらしさを体感することができた。



子ども自身の学びと教室での学び

社会科
3年A組担任
山崎 立也

**社会科では**

本年度、3年生を担当しています。3年生では、社会科と理科が新しい教科として登場します。2年生までは生活科があり、社会科理科が単純に生活科の発展的教科と言えませんが、生活科の考え方や低学年の発達段階を考慮して、はじめての教科に期待している子どもたちに伝えていきたいと思っています。

社会科の学習内容は、主として現代社会の事象を取り上げ、より具体的・直接的に現実社会とかがわり合うと言えます。子どもたちは、「ひと」や「もの」「こと」を通して、社会で生活する人の生き様に触れ、思いや願いを知り、社会の一員として成長していくと考えています。3年生の子どもたちは、発達段階でいっても具体的な例を取り上げないと、社会嫌いな子どもをつくる原因にもなると思われます。生活科の目標を見ても、「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身につけさせ、自立の基礎を養う」（学習指導要領より）とあります。中学年では、抽象的操作が始っていく頃とされていますが、3年生の子どもたちは、まだまだ2年生に近い子どもたちも多く見られます。そのため、生活科の目標に掲げられたものを継いでいく必要もおおいにあると思っています。

学級では

本学級では、今年度に「反応する」という言葉をキーワードとして取り組んでいます。仲間の話に耳を傾け、それに対して、自分の意思を表現しようということです。言葉で言えない時もあるかもわかりません。表情やつばやきなど何らかの形で自分の意思を伝えていこうとしています。話を聞くということが前提にはありますが、聞いている中で、自分の中に考えや思いが沸き起こってくることも考えられます。でも、まずは、話し手に話を聞いてくれているという思いをもたせることかなと思います。

授業では

(全体の中で)研究会では、わたしのいちおし～畑ではたらく人のすごさ～の授業をしました。見学した農家の人の仕事について子どもたちが見たことを始まりとして、クラスみんなで仕事全体に迫っていこうと考えました。学級では、ひとりひとりが見てきたことを出し合ってつないでいくことにしました。でもみんなの中では言えない子どもや大勢でするなかで集中力がなくなっていく子どもも多く見られます。もっと人数の少ない中で話し合ってみると、今まではあんまり話し合っていない子どもがよくしゃべっているという場面も見られました。自分と友達との距離感が近いとか、自分が求められていることをより強く感じるのでしょうか。(個人の学習で)自分の意見や調べていることがないと、少人数にしても参加する態度に差が出てきます。だから自分で調べようと考えなければなりません。どのようなことを調べたらいいのでしょうか。まず、自分が聞いたり調べたりしたことをそのまま受け取るのではなく、自分の身近なものに置き換えてみることで。例えば、見学した農家では「600坪の畑で野菜を作っているそうだ。」ということを知りました。600坪というのは、どれくらいだろうということが問題になります。その広さを子どもたちがみんなに共通で知っているもの置き換えてみると、その大きさをより自分に近づけて考えることができます。教室の何個分?というように。これは、ひとりでもできることです。



また、考えてみようという問いかけの文が作れるかということです。ある子どもが、朝の会のスピーチ(毎朝日直が行う)で、回転ずしの新装開店に行ってきた話をしました。その中に「回転寿司なのにタコ焼きが流れていました。」という話がありました。見たままで確認する文章を、なぜどうしてが出てくるような文章に変えてあげると、子どもたちはあれこれと話を始めます。「どうして回転寿司なのにタコ焼きが流れているのだろう。」というように文頭になぜやどうしてという言葉をつけていくと、明らかにしていく問題が生まれてきます。「子どもが多いからじゃないかな。」「大人は子どもにあまいから。」などと子どもたちが口々に話し始めます。そこで、本当にと突っ込んであげると、証拠をもって話す子どももいれば、黙ってしまう子どもも出てきます。どうすればいいのかわからないのでしょ。聞く時に具体的に聞いてあげると、次回は言われなくとも調べてくるかもしれません。今、3Aのクラスの子は、「それだったら先生に何でなっかって聞かれるで。」と言っています。参考文献：有田和正著 授業は「はてな？」を発見させることから 明治図書 2003.11

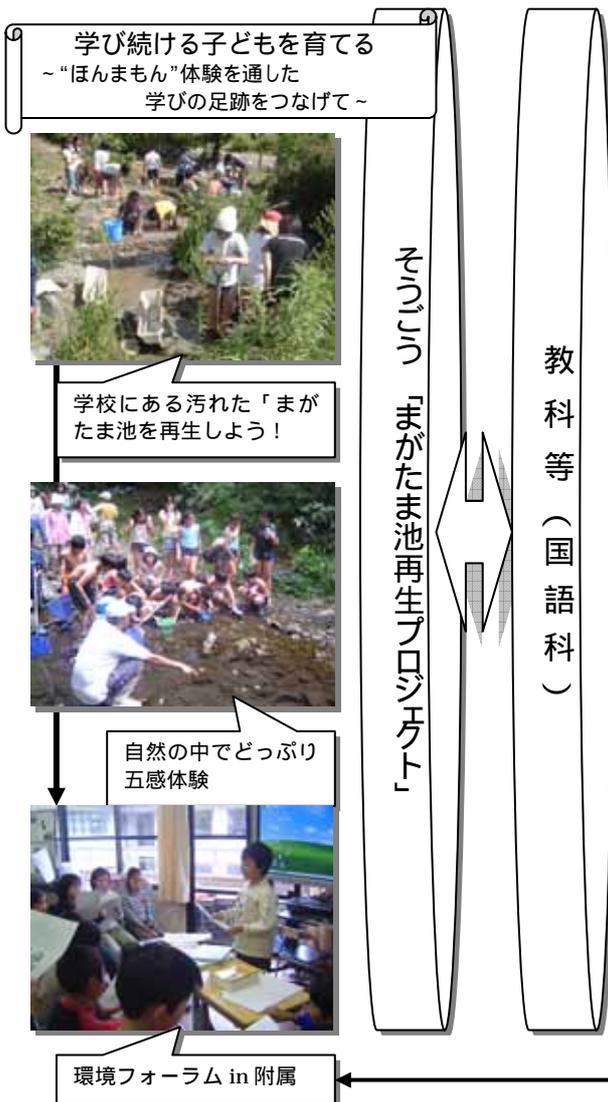
総合と教科の連携による学びの深まり キーワードは切実感！！

総合部
5年A組担任
山中 昭岳



今、新しい学習指導要領について話題となっています。その中でも総合的な学習の時間（本校では「そうごう」）の時数削減が新聞でも大きく報道されました。実はあまり気にしていません。今まで少ない時数の中、教科等との連携を図り「そうごう」を行ってきました。

本稿では、5年A組そうごう「まがたま池再生プロジェクト」の実践における国語科を中心とした連携をご紹介します。



お願いの手紙、お礼の手紙

この単元目標は、敬語を意識しながら、依頼状・お礼状の書き方を知って書き、生活に生かす意欲をもつことである。この単元で必要なものは、相手意識である。ただ単に書き方を知るだけでは生活に生かす意欲をもつことはなく、また実際に活用できない。そこで、本実践では専門家とのかかわりや他校の友だちとの交流において実際に活用する場面を設定した。
手紙だけに限らず、FAXやE-mailも活用し、さらに発展して電話で専門家にインタビューさせてもらえるようお願いすることを行った。敬語の使い方、自己紹介の仕方、話す順序など学んだことを生かして電話をしていた。

言葉の研究レポート

この単元の目標はレポートの書き方を知り、調べたことをレポートに書いて交流し、関心をさらに深めることである。みんなに自分のやっていることを知らせたいという思いを、また自分の考えをまとめる機会としてそうごうで行ってきた活動をレポートにまとめさせた。レポートの構成を教科書で学び、さらに発展させてレイアウトも工夫して相手にわかりやすくなるようにつくっていた。

インタビュー名人になるう

この単元の目標は、目的に沿って尋ねることを整理し、相手にわかりやすく話したり、答えを正確に聞いたりすることである。本実践では実際に専門家の方々、そして交流校の友だちとのかかわりにおいて必然的にこの目標を達成されなければならない。
擬似的な体験や練習だけの授業ではなく、実際にインタビューしなければならぬ内容があり、本当に相手がいるということが大切である。



人と「もの」との付き合い方

この単元の目標は、自分なりの課題をもって調べ、発表して交流し、まとめようとして書くことを通じて、自分の生活の中での「もの」との付き合い方を見直すことである。この単元では、ごみ問題について扱っているが、実際に子どもたちが切実感をもって取り組んでいる課題を題材として取り組んだ。すなわち本実践の環境フォーラム in 附属は、まさにこの単元の拡大版となっているのである。

「自然と人の共生を考えた」評価基準表
年 級 名前 ()

今日の活動が、どの項目に関連するの考えながら学習していきましょう。

ミッション:
11月10日(土) 環境フォーラム in 附属へ
行。道順、グループが分かれ、おまじり池をいかに綺麗にしようとするの
端に落ちたおまじり池の自然の環境について調査し、おまじり池の自然環境の調査報告書

学習のゴール	ゴール達成の目安	達成の目安	達成の目安
グループ	協力性	全員が協力して話し合い、意見をまとめた。話し合いの場を大切に活用した。	話し合いの場を大切に活用した。話し合いの場を大切に活用した。
計画性	計画性	事前に話し合い、計画を立てた。話し合いの場を大切に活用した。	事前に話し合い、計画を立てた。話し合いの場を大切に活用した。
学習意欲	学習意欲	積極的に話し合い、意見をまとめた。話し合いの場を大切に活用した。	積極的に話し合い、意見をまとめた。話し合いの場を大切に活用した。
自己反省	改善	自分の話し合いの場を大切に活用した。話し合いの場を大切に活用した。	自分の話し合いの場を大切に活用した。話し合いの場を大切に活用した。
探究力	探究力	積極的に話し合い、意見をまとめた。話し合いの場を大切に活用した。	積極的に話し合い、意見をまとめた。話し合いの場を大切に活用した。
スキル	表現力	積極的に話し合い、意見をまとめた。話し合いの場を大切に活用した。	積極的に話し合い、意見をまとめた。話し合いの場を大切に活用した。
評価	評価	積極的に話し合い、意見をまとめた。話し合いの場を大切に活用した。	積極的に話し合い、意見をまとめた。話し合いの場を大切に活用した。

上記の国語科で行われている内容は「そうごう」の活動になるのですが、教科で達成すべき目標をよりしっかりと子どもたちに身に付けさせることができました。これらの学習のキーワードは「切実感」です。目的意識、相手意識を明確にもち自分のととして学習に取り組めたのです。

最後に、総合的な学習の時間を進めていく上で大切なことは、総合的な学習の時間におけるねらいや育てたい力を明確にすることです。右図に子どもたち自身が自ら付けたい力を明確にした表を紹介して終わりにします。

国語科における協同的な学びの実現

～アシスト発言と自己変革の意識づけによって～

国語科
6年C担任
須佐 宏

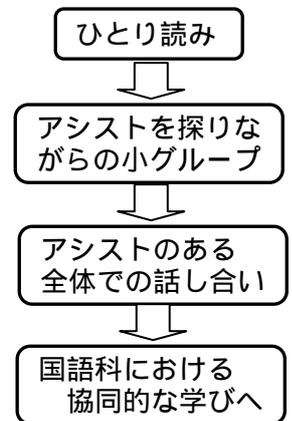


「自分の考えを伝えられない子」を助長する悪循環

学年が進むにつれて発言する子が固定化してしまうということがないだろうか。しかし、子どもたちの学習目標や作文などには「発表をがんばりたい。」「もう少し発表したい。」という思いが綴られている。発言には至らないが、自分なりの考えを持っている子はたくさんいる。でも発言できない。その理由は大きく分けて2つあると考えている。一つは、「どこで発言していいのかわからない。」というもの。もう一つは、「自信がないから手をあげられない。」というものである。この子たちにも活躍の場をあたえようと教師が指名することもあるがそれでは授業に流れが生まれてこない。それでも子どもたちにより深い読みをさせようと、高みを目指して授業を進める。そうすると、読解力があって自分の発言に自信が持てる一部の子たちを中心に授業が進み、気がつけば、他の子たちがお客さんになってしまうような授業になってしまっていることが多い。そんな授業が「自分の考えを伝えられない子」をさらに助長するといった悪循環を引き起こしているように感じる。

国語科における協同的な学びを実現するための「アシスト発言」

佐藤学先生から、「協同的な学びによってどの子にもジャンプがある(=どの子にも学びのある)授業の大切さ」を教えていただいた。そして、3～4人による小グループでの学習が有効であることも教えていただいた。そこで、国語の学習ではこれまであまり行ってこなかった4人によるグループ学習を本学級でも取り入れた。授業では、これまで通り「ひとり読み」の時間を十分確保し、まずは自分の考えを持たせて話し合いに臨めるようにした。これまでは、それを持って全体の話し合いに臨ませていた。今年度は、いったん小グループで話し合う機会を持ってから全体の話し合いを迎えることにした。しかし、そのままでは、小グループでの発言はできるが、全体の場ではこれまで通り数名の子しか発言できない。そこで、子どもたちに「アシスト発言」を意識して小グループの話し合いをさせることにした。



「アシスト」とは・・・サッカーのゲームでシュートを決めた選手に、シュートにつながるようなパスを送ること
「アシスト発言」とは・・・誰もが発言可能な小グループにおいて、グループの友達の考えをしっかりと把握しておくことで、全体の話し合いのときに、「この考えはAさんと似ている。」「Bさんは、それについてこんな考えを持っている。」と判断する。そして「それについてAくんがいい考えを持っています。」や「私はこう思うんだけどBさんはこんな考えを持っています。」というように発言の機会を捉えた別の子が紹介し、その子に発言を促していくこと



アシスト発言を受けた子は、互いの考えを伝え聞く中で、自分の考えを後押ししてくれる友達の発言を受けて発言することになるので、自信も持てるし、学習の流れも自然となる。アシスト発言が機能するようになってくると小グループでの聞き合いも充実してくるし、どの子もいつ指名されてもいいように心構えができてくるので流れがスムーズになる。中には、「俺の考えアシストしてくれよ。」というような発言をする子も出てくる。11月10日に行った研究発表会の授業でも子どもたちは、社会科・総合・国語をリンクさせた一連の平和学習を通して持った「十二歳の今、自分の中に芽生えた戦争・平和への思い」について、これまでの学習と友達の発言を関連づけながら考えを伝え合った。そこでも3人がアシスト発言を行い、アシストがなければ出なかったであろう6人の発言を全体のものとして共有することができた。

自己変革の意識づけ

授業の終わりには、こうした「ひとり読み」「アシストを探りながらの小グループでの話し合い」「アシストのある全体での話し合い」を経て、自分自身の考えがどう変わったのか(変化・深化・追加)を振り返り、その変化が誰のどんな考えに触れたことによるものなのかを記録させている。子どもたちが、毎時間の振り返りを意識し始めたことでより聞き合う関係ができてきたように感じる。初めはなかなか機能しなかったこのアシスト発言システムの有効性をもうしばらく探ってみたいと思っている。

以前勤務していた学校でのことです。算数の授業中、私に、一人の子どもが突然つぶやくように問いかけてきたのです。「先生、なんで算数勉強せなあかんの？」教職について7、8年経っていましたが、恥ずかしながら、その時はうまく答えられなかった記憶があります。たぶん、「将来役に立つからや」などといってごまかしたと思います。今年担任している1年生は、まだこのようには聞いてきませんが、「学ぶこと」をあらためて考える毎日です。

本来学習とは、子どもたちが将来生きていくなかで、生活をより豊かで快適なものにするために役立つものであるべきだと、私は考えています。人間が生きていくとき、経済的に豊かな生活を求めますが、それ以上に、内面的に豊かな生活を求めたいものです。現代社会では人々の価値観は多様化してきています。人々が生きていく上でいろんな個性がぶつかり合ったり摩擦しあったりして、あちらこちらで様々な困難に直面します。そんななかで周囲の状況を的確に把握し、きちんと自分の考えを持って、解決していけるような生き方をすることも豊かで快適な生活の一つでしょう。

「算数を学ぶ」から「算数で学ぶ」へ

岡田明彦

日常生活の中で、ある問題を解決しようとするとき、たいいてい人は、いかに効率よく解決するかを考えるでしょう。よい意味で楽をしようとするのです。そのためには、ただやみくもにその問題に取り組むだけではよけいに苦しくなります。今何が一番問題になっているのか、それを解決するために考えられる方法は何なのか、今の状況で足りないものは何か、過去に似たような状況に出会ったことはないか、まず部分的に解決できそうなところはないか、などその問題を総合的に見て、整理して、筋道を立てて考えようとするでしょう。つまり問題を解決するということは必要な情報を集めそれを処理することなのです。また、なかまと協力して問題を解決しようとするときはどうでしょうか。友だちと意見を出し合ったり議論をしあったりしていくなかで、お互いの論点をきちんと取り出し理路整然と進めなくてはなりません。議論が成立するためには、お互いが「論理的に考えよう」という意識をもつことが必要です。それでは、子どもたちはそうした「論理的な考え」をいったいどこで学ぶのでしょうか。私は、算数・数学という学問がその役割を担っていると信じています。

「算数を学ぶ」ではなくて、「算数で学ぶ」ことが大切です。



2008.2.1 金

13:00 ~

**第2回
ICT活用
授業研究会**

2008.2.15 金

13:15 ~

**国語力向上
モデル事業
研究会**

詳しくは、本校HPで

From Editors

研究発表会ありがとうございました。

寒さも厳しくなってきました。2007年もあとわずかです。HPではカラーで紹介していますので是非ご覧ください。

ご意見・ご感想をお寄せ下されば幸いです。

和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号

TEL (073) 422-6105

FAX (073) 436-6470

URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>

E-mail fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp